

平成 20 年度動物慰霊式

科学分析支援センター 畠山 晋

平成 20 年度埼玉大学実験動物慰霊式が 10 月 7 日(火)14 時 00 分から理学部 2 号館第一会議室において執り行われました。本年から埼玉大学の主催となり、動物飼育室の維持管理を担う科学分析支援センターが式の開催業務を執りました。式には、教育および研究の目的で実験動物を使用している方々、科学分析支援センター教職員、そして動物の御霊に感謝し安らかな眠りを祈りたいという方々、合わせて 82 名の教職員および学生の参加者がありました。

科学分析支援センター長の円谷陽一教授の開式のことばによって式が開かれ、町田武生・副学長のあいさつがありました。実験動物を扱う者の責務として、苦痛の軽減、適正な動物実験、何に於いても、常に動物に対する愛護と感謝の気持ちを持つことが大事である述べ、あいさつを終えました。続いて動物飼育室の利用者を代表して足立明人准教授(理工学研究科)より慰霊のことばが捧げられました。教育・研究の名のもとに犠牲になられた動物の一つ一つの御霊への敬意と安らかな眠りを祈り、教育・研究に打ち込むことによって、優れた成果を世の中に出すことが、動物の御霊に対する何よりの供養である、と述べられました。次に参加者全員によって花が捧げられ、黙祷することによって、参席の方々が実験動物の御霊に対する感謝の気持ちを捧げ安らかな眠りを祈りました。最後に井上金治・理学部長のことばによって式が閉じられました。とくに、普段実験動物を扱っている方々は、動物の苦痛と犠牲を出来る限り少なくし、かつ最大限の成果を上げられるように工夫した実験を行わねばならないという思いを新たにしました。

「動物の愛護及び管理に関する法律」では、国民の間に広く動物の愛護と適正な飼養についての理解と関心を深めるため、9 月 20 日から 26 日を動物愛護週間と定めています。埼玉大学においてもこの主旨を理解し、実験に供される動物に対して感謝の気持ちを常に忘れることなく、教育と研究において適正にかつ最大限の効果によって動物実験が行われなければなりません。今回で 4 回目の開催となったこの式を通じて、動物に対する真の慈しみの気持ちが埼玉大学において動物実験を行なう方々の中に涵養することを信じてやみません。